

「根古谷台遺跡」

～縄文時代の死者の祭りの場であったか～

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

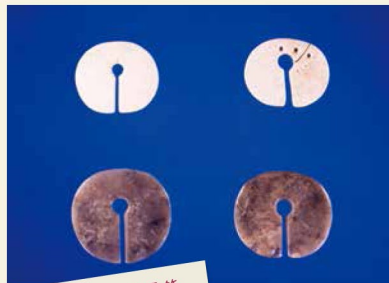
宇都宮市の南西部、上欠町の霊園墓地「聖山公園」に隣接して「根古谷台遺跡」、公園名「うつのみや遺跡の広場」がある。根古谷台遺跡は、姿川と武子川の合流点近く、両河川に挟まれた舌状に伸びる台地の上にある。この台地には以前から古墳時代の遺跡の存在が知られ、墓園造成にあたり記録保存を目的として、昭和五十七年から六十二年にかけて発掘調査を実施した。その結果、予想もなかった縄文時代前期（六、〇〇〇年前～五、〇〇〇年前）の東西約三〇〇メートル、南北約一五〇メートルに及ぶ大規模集落跡が発見された。そのため当初の墓園計画の一部を変更して「根古谷台遺跡」として現状保存することにし、後に遺跡の隣接地を含め史跡公園「うつのみやの遺跡の広場」として整備したものである。

根古谷台遺跡が注目されるのは、集落跡の範囲が広いこととされることながら、直径六〇メートル程の広場を中心に大型建物跡が環状に取り囲む環状集落をなしていること。大型建物跡については竪穴住居跡が二七棟、長方形大型建物跡一五棟、方形建物跡一〇棟、掘立柱建物跡一七棟の計六九棟が発掘されており、中でも長方形大型建物跡、方形建物跡、掘立柱建物跡が特殊な用途のために使用されていたのではないかとと思われること。中心の広場には三三九基もの墓穴と思われるものが発見され、そのうち七基の墓穴から遺体埋葬の実態を示す石製耳飾四個、石製丸玉二個、石製小玉五個、石製管玉二三個等の精巧な装身具類が出土したことである。こうしたことから後に遺跡全体が国の史跡に、耳飾等は国の重要文化財にそれぞれ指定された。

さて、問題の長方形大型建物跡、方形建物跡、掘立柱建物跡である。これらの建物群はいずれもある規格で建て替えられ、しかも建物の主軸が墓穴群の方向にあること、床面が軟弱であること、生活用具の出土が少ないことなどの特徴がみられる。このように建物群が中央の墓穴群を取り囲むように位置することや日常生活の匂いが薄いことから、これら建物群は死者を弔い・供養する施設であったのではないかとと思われる。特に長方形大型建物跡については全長が一四メートル四角と長大である。多くの人間が一堂に会して集まった施設としか思われない。特異な力を持った先祖の祭りのために作られたものであったろうか。

次に墓穴から出土した耳飾等の装飾品である。硬い石でありながら極めて精巧にできている。鉄製道具が無かった時代、どのようにして形作ったのか不思議でならず、当時の技術の高さが窺える。出土状態は、石製球状耳飾が二個ずつ対になって、また石製丸玉・小玉が石製管玉とともに数個ずつ組み合せてそれぞれ二基の墓穴から出土する等、装身具を装着したままの遺体埋葬の実態を示している。墓穴が長軸一辺前後であることから、手足を折り曲げて埋葬したものと思われる。また、墓穴自体が数基一〇基単位に環状あるいは弧状に並べて発見されていることから、ごく近い血縁関係者の墓とも思われる。

根古谷台遺跡からは、死者に対する当時の人々の高い精神性が窺える。奇しくも隣接して現代の墓園が作られた。奇遇といえば奇遇である。



精巧に作られた球状耳飾



日本最大級の縄文大型建物